

川越市教育委員会第8回定例会会議録

- 1 会議の場所 川越市教育委員会 教育委員会室
- 2 開 会 令和5年9月22日 午後2時
- 3 閉 会 令和5年9月22日 午後3時20分
- 4 教育長並びに出席した委員 新保正俊、長谷川 均、佐久間佳枝、飯島 希
- 5 欠席委員 嶋野道弘
- 6 教育長の職務を行った者 教育長新保正俊
- 7 説明のため出席した者 教育総務部長長岡聡司、学校教育部長岡島一恵、教育総務部副部長兼教育総務課長佐藤利貞、学校教育部副部長兼学校管理課長西貝俊哉、教育総務部参事兼中央公民館長中里良明、学校教育部参事兼教育指導課長早川美彦、学校教育部参事兼教育センター所長嘉手川 満、教育財務課長飯野雅史、地域教育支援課長武藤貴子、文化財保護課長齊木 隆、中央図書館長富田 稔、博物館長岡田賢治、学校給食課長宮沢 茂、市立川越高等学校事務長松本秀規

8 前回会議録の承認

令和4年度第12回定例会会議録、第13回定例会会議録を承認した。

令和5年度第1回定例会会議録、第2回定例会会議録、第3回定例会会議録、第4回定例会会議録、第5回臨時会会議録、第6回臨時会会議録、第7回定例会会議録については、現在、調整中であり、次回会議において承認することになった。

9 議題及び議事の概要

日程第1議案第31号 令和6年度当初教職員人事異動の方針・細部事項について
(非公開)

日程第2議案第32号 川越市社会教育委員を委嘱することについて
(非公開)

10 報告事項

(1) 博物館来館者用トイレ工事に伴う休館について

博物館長

来館者用トイレの改修工事に伴い、博物館を休館するものであるが、工事内容としては、污水管の改修、女性用トイレ便器の洋式化、個室ブースの拡張、内装の改修等を行うものである。工事に伴う休館期間は、12月4日から翌年3月15日までを予定しているが、契約の状況によっては変更となる場合がある。

休館の理由としては、第1に、来館者の安全確保を図るため、第2に、騒音等による博物館の快適な利用環境を維持できないため、第3に、来館者用トイレが使用できなくなるためである。

休館期間中の実施事業について、体験教室講座等は、公民館、図書館で実施し、

例年実施しているバスを利用した市立小学校第3学年の博物館利用は安全面に留意しながら実施する。また、議会提出の補正予算案により常設展示室の城下町模型及び蔵造りの町並み模型の補強改修も休館期間中に合わせて実施する予定である。

委員

トイレ改修工事に伴う休館期間が12月4日から3月15日とあるが、約3か月半もかかるとみられてしまう。休館期間に常設展示室の城下町模型及び蔵造りの町並み模型の補強改修を合わせて実施することを、ホームページなどで公開した方がよいと思う。

博物館長

意見を参考にホームページなどで公開したい。

委員

女性用のトイレの便器の洋式化と書いてあるが男性用トイレはどうなっているのか。

博物館長

男性用トイレは、洋式の大便器が1基あり、他は小便器である。

(2) 令和5年度全国学力・学習状況調査及び令和5年度埼玉県学力・学習状況調査の結果について

参事兼教育指導課長

令和5年度全国学力・学習状況調査は小学校6年生と中学校3年生を対象として、国語、算数及び数学、中学校英語による3教科の学力調査と児童生徒、学校への質問紙での学習調査・学習状況調査を行っている。

全国平均正答率との差については、川越市と全国の平均正答率との差をまとめたものであり、今年度の結果は、中学校国語において、全国の平均正答率を0.2ポイント上回っているが、その他の教科においては、全国の平均正答率を下回っており、特に小学校算数においてはマイナス2.5ポイントの差がある。

全国平均正答率との差の推移については、市の平均正答率と、全国の平均正答率との差の推移を表したものになる。小学校6年生の国語について、平成31年度は全国の平均正答率からマイナス4.8ポイント、令和3年度はマイナス1.7ポイント、令和4年度はマイナス0.6ポイント、今年度はマイナス1.2ポイントとなっている。下段の折れ線グラフは、全国との差の推移を視覚化したもので、平成31年度からの推移を見ると、本市が全国との差を縮めている傾向を見ることができるが、小学校国語、算数、中学校数学において、今年度は昨年度より全国との差が大きくなっているため、今年度の分析を加えた学力向上の取組を推進するとともに、次年度の結果を注視していきたい。

教科別の正答数分布グラフについて、棒グラフが本市の分布を示し、折れ線グラフが県・全国の分析を示している。棒グラフの黒く示した部分が正答数の高い児童

生徒の数が全国と比較して開きがある部分である。小学校国語・算数、中学校数学・英語において上位層の児童生徒の割合が少ない結果となっている。

教科別内容・領域ごとの平均正答率について、まず小学校においての課題等は、国語については、書くことに関する平均正答率において、全国との差がマイナス4.5ポイントとなっている。算数については、全ての領域において、全国よりマイナス1.7ポイント以上の差が見られる。特に数と計算の領域では、全国との差がマイナス3.2ポイントとなっている。図形に関する領域では、全国との差がマイナス2.8ポイントとなっている。

評価の観点においては、知識・技能、思考・判断・表現ともに全国との差がある。また、国語、算数ともに問題形式では、記述式の正答率において、全国との差が大きい傾向がある。

中学校3年生の内容、領域ごとの平均正答率について、国語、数学、英語ともに全国平均並みの結果となっており、内容領域ごとの正答率も全国と同様の傾向を示している。国語では、情報の扱い方に関する事項でマイナス0.2ポイント。我が国の言語文化に関する事項でマイナス0.9ポイント全国との差があるが、全体では全国平均正答率を0.2ポイント上回る結果となっている。数学では数と式の領域において、全国とマイナス2.3ポイントの差がある。データの活用の領域においては、全国との差はマイナス1.1ポイントの差だが、埼玉県正答率との比較ではマイナス4.6ポイントと大きな差があり、今後の課題と捉えている。英語については書くことの領域で、全国からマイナス1.9ポイントの差があり、平均正答率が21.5ポイントであることから、全国と同様に、課題であると捉えている。

児童・生徒への質問紙から学習に関する状況の調査について、数値は各質問に肯定的に回答した割合を示し、網掛けの部分は全国平均を上回ったもので、その中で下線の付いたものは埼玉県の平均においても上回った数値になっている。自己有用感に関する質問では、「自分には、よいところがあると思いますか」という質問では、全国平均を若干下回っているが、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という質問では、全国平均よりも高く、肯定的に回答している。家庭学習に関する質問においては、おおむね全国平均を上回っているが、埼玉平均については下回っている。ICT活用に関する質問では、今年度は使用回数において全国、県を若干下回っている。しかしながら、児童生徒はICT活用の効果について肯定的に捉えており、学校において1人1台端末の効果的な活用の実践が行われている成果と捉えている。また、読書に関する質問では、読書時間は全国を上回っており、地域に関する質問では、地域行事への参加割合が全国、県を上回っており、昨年度から全校で取り組んでいる川越市ふるさと学習の一定の成果と捉えている。

学校への質問紙から、学校教育の状況を調査しており、教職員の資質能力の向上に関する質問では、授業研究などの研修については、全国を上回り、各校において、校内研修等に取り組んでいる成果であると捉えている。個々の教員の専門性を高める研修への参加については、小学校においては全国を上回っているが、中学校においては、全国、県より低い状況である。授業改善に関する質問では、主体的対話的で深い学びの視点からの授業改善に係る質問を抜粋した。本市においては、協働的な学びに係る質問においては、全国を大きく上回っており、令和2年度より取り組んできた川越市小・中学生学力向上プランにおける対話協働を中心とした授業改善の一定の成果であると捉えている。今後は個別最適な学びの充実とともに、今年度の分析を踏まえて取組を進めることが重要であると捉えている。ICT活用に関する質問では、児童・生徒の回答と同様に、職員の活用状況も全国県を上回っている。校種間連携に関する質問では、小・中学校ともに全国県を上回っている。また家庭学習に関する質問では、方法の提示や保護者への周知について、小学校では全国を上回っているが、中学校では全国と差がある状況である。児童・生徒の質問者の回答状況とあわせて考えると、家庭学習の時間の確保と習慣化ができていない状況を活かし、今年度配布した学力向上プランを活用するなど、家庭学習の内容を充実させる取組を進めていくことが重要であると捉えている。

小学校6年生の国語の問題から、正答率が低く、無回答率も高い問題を形成した。書くことに関する内容で、複数の文章を正しく読み取り、条件に合わせて自分で文章を構成し、記述する設問となっている。小学校6年生の算数の問題から、正答率が低く、無回答率も高い問題を形成した。高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係をもとに、面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかを見る設問となっている。

知識・技能の習熟において課題が顕著に見られた点を説明する。設問は、日常の事象を数理的に捉え、数学的に表現処理することを見る問題となっている。日常の事象という点で、教室のロッカーに辞典を並べる状況が設定されている。分配法則を用いた計算問題について、全国との差がマイナス6.4ポイントと大きな開きがある。

以上、国語と算数の問題を紹介したが、全国学力・学習状況調査では、現行の学習指導要領が求める「育成を目指す資質・能力」を具体的に示す形で問題が構成されており、調査における問題自体が授業改善に役立つようになっている。調査に用いられた問題の分析を今後も継続して行い、学力向上の具体的な取組に生かしていきたい。

続いて、令和5年度埼玉県学力・学習状況調査の結果についてだが、本調査は、埼玉県内の小学校4年生から中学校3年生を対象として行われ、調査事項は小学校4年生から中学校1年生は国語、算数、数学、中学2年生及び中学3年生は、国語、

数学、英語の学力調査と児童生徒、学校への質問紙調査となっている。

今年度本市は、C B T方式により調査を実施した。C B Tとは、コンピュータベースドテストの略で、児童生徒1人1人が、学習者用コンピュータを使用する調査方式を意味する。安定的な通信環境のもとで調査が実施できるよう、県が示す調査実施期間内で、川越市教育委員会が学年ごとに実施日を指定した。今回の調査では、C B T方式の特性を活かし、映像を活用しての、より実際の学習場面に即した問題が出題された。

埼玉県平均正答率との差について、本市と埼玉県の平均正答率の差をまとめたもので、平均正答率との差の推移は市の平均正答率と県の平均正答率との差の推移を表したものである。例えば、中学校1年生は国語において、令和3年度はマイナス1.2ポイント、令和4年度はマイナス0.7ポイント、今年度についてはマイナス0.3ポイントとなっている。これら2つの資料から中学2年生の英語で、埼玉県平均を上回っているものの、他については埼玉県平均より低い状況であり、特に算数・数学においては、埼玉県平均との差が大きい状況であるということが言える。

学力を伸ばした児童生徒の割合については、学力を伸ばした児童生徒の割合を表した資料となり、学力を伸ばした児童生徒とは、埼玉県により36段階に数値化された個々の学力レベルが昨年度より1以上増加している児童生徒を指している。

小学校5年生国語を例に挙げると、埼玉県では80.2%、川越市では72.7%の児童が学力を伸ばしており、学力を伸ばした児童の割合が最も多い本市の小学校は88.9%の児童が学力を伸ばしたことになる。また、学力を伸ばした児童の割合が埼玉県平均の80.2%を超える学校は32校中7校あることを表している。中学校1年生の国語では特に成果が上がっていることがわかれると思う。川越市学力向上プランとの関係については、児童生徒質問紙調査から見通し、学び合い、まとめ、振り返りの授業場面について児童生徒がどのように捉えているかを昨年度からの経年変化としてまとめている。

小・中学校ともに学び合い、まとめ、振り返りについて一定の成果が見られ、特に中学校の学び合いについては、昨年度から4.3%上昇が見られる。

児童生徒質問紙調査結果の中から、自分自身に関わること、先生や友達との関係、川越市の歴史や自然に関することについて抜粋し、まとめたものについて、当てはまる、どちらかといえば当てはまると回答した児童生徒の割合である。なお、埼玉県の平均を上回ったものは、網掛けとなっており、各学校の状況や埼玉県平均との差を示すグラフを下段に掲載している。

児童生徒質問紙調査結果の中から、学習者用コンピュータに係る項目について抜粋し、まとめたものについて、網掛けとなっている項目は、埼玉県平均を上回っている項目である。国語、算数・数学、英語の授業で週に1

回以上、学習者用コンピュータを使うと答えた児童生徒の割合は、国語の授業において多い傾向にあり、小学校6年生、中学校3年生を抽出すると。課題を提出する、テストを受ける、インターネットで調べ物をする、動画を撮影したり、録音したりするといった用途が多くなっていることがわかる。

小学校6年生及び中学校3年生の児童生徒質問紙調査結果の中から、学習者用コンピュータを家に持ち帰って学習に使用する頻度を抜粋し、まとめたもので、家に持ち帰っていると答えた児童生徒の割合は、両学年とも埼玉県から大きな差は見られなかった。

規律ある態度達成目標に係る結果について、埼玉県平均を上回った項目は、網掛けに、本市の80%以上の児童生徒が達成したと答えるものにはさらに下線を引いている。川越市の小・中学生は全72項目中69項目で達成率80%を超えており、昨年度から大幅な増加が見られる。校外行事の充実や、いじめ防止、体力向上の推進等に取り組んできた成果の一つと捉えることができる。

今年度、C B T方式により調査を実施したことから、C B T方式と、従来の調査方式とに大きな差異があるのかについて検証を行い、折れ線グラフで示したのは、令和5年7月に実施した情報活用値が、情報活用能力調査において、主にローマ字入力がよくできると回答した児童生徒の割合、棒グラフは、当該当該学年における短答式問題の昨年度から今年度への正答率の変化量を表したものである。資料の見方として、棒グラフとこの折れ線グラフが同じように右肩上がりになっている場合であれば、相関があるということとなり、どの学年においても、折れ線グラフと棒グラフに相関関係は見られないことから、従来の方式から、C B T方式に調査方式が変更されたことにより、平均正答率に大きな影響を及ぼすことはなかったと推測している。

算数・数学における学力の伸びについて、埼玉県と比較すると、どの集団も県と比べて伸びが緩やかな傾向にあり、中位層と下位層においては、埼玉県との差が顕著に見られる。中でも中学校1年生の階層については、昨年度から今年度にかけて大幅な低下が見られる。

算数・数学における小学校6年生、中学校3年生の問題別正答率について、折れ線グラフは、埼玉県の生徒率を、棒グラフは本市の生徒率を表しており、色の濃い棒グラフは県との差が大きい問題である。評価の観点に、白丸がある問題は、知識・技能を、黒丸がある問題は、思考・判断・表現をみる問題となっている。網掛けとなっている問題の多くに白丸がついており、知識・技能をみる問題について、埼玉県との差が見られることがわかった。このことから、思考力・判断力・表現力の育成とともに、知識・技能の習熟において大きな課題があると捉えている。

今年度の全国学力・学習状況調査及び埼玉県学力・学習状況調査の分析から、川越市小・中学生学力向上プランを推進し、一定の成果を対話協働的な学びの点にお

いてみる事ができた。しかしながら、知識・技能の定着及び習熟と思考力判断力表現力の育成について、バランスのとれた指導を行っていくことが今後の重要な課題であると捉えている。

今年度においては、本調査結果の分析を活かし、学校訪問等を通じた授業改善の指導を継続して取り組んでいくとともに、令和6年度に向けて川越市小・中学生学力向上プランを更新して、さらなる学力向上に取り組んでいきたいと考えている。

委員

各同一集団の算数／数学における学力の伸びのグラフについて、36の数値というのは、中学校3年生卒業時の学力の目標値と考えればよいのか。

参事兼教育指導課長

学力のレベルということで考えてほしい。到達点というよりは、子供たちの学力がどのように伸びているかを見やすく示したもので、ゴール地点というより、学力がどの程度伸びているかを36のレベルに分けたものと考えてほしい。

委員

昨年よりも問題を解ける力がついたと見ていけばよいと理解したが、横ばいの状態は、伸びがなかったということか。

参事兼教育指導課長

そのとおりである。その評価において、その生徒の伸びが数値的にはみられなかったということである。

委員

グラフを見るとそのような子たちが多く、大きな課題だと感じた。児童生徒質問紙調査結果について、先生や友達が、自分のよいところを認めてくれたかの問いに対して、よい数値が出て安心している。自分には、よいところがあると思うかの問いに対して、先の数字ほど本人は自分によりよいところがあると認めていない。子どもたちが謙虚な心を持っていると捉えているが、どのように捉えているか。

参事兼教育指導課長

指摘いただいたことに加えて、子どもたちが自分のよさを感じることができる機会を多く学校現場に求めていく必要もあると思う。個々によって差があると思うので、そのような部分を含めて、あらゆる機会を通して子どもたちの自己有用感が高められる機会を設定していこうと、教育委員会としても呼びかけしていきたい。

委員

「規律ある態度」の達成目標についての数値が埼玉県の数値を上回っており、喜ばしい内容である。昨年度から大幅に増えているが、何か要因はあるのか。

参事兼教育指導課長

昨年度の結果と比べて1番よかったと感じたことは、挨拶の数値が伸びたところである。令和4年度は、コロナの影響もあり、子どもたちが大きな声で挨拶をする

ことが非常に制限をされた期間だった。ただ、コロナ禍も収まり、数値が上がってきたことは、学校教育が正常化に戻りつつある一つの指数だと思う。

委員

コロナ禍は、世界的にも日本でもみんなに起きたことで、その中においても、特に本市はいい数値になったということは、先生方の努力のおかげで非常に喜ばしいことだと思う。

委員

毎年、全国学力・学習状況調査の結果について報告があるが、今回も結果を見ると特に小学校の算数は全国と差があると思う。結果に基づき、様々な分析をし、色々な取組をしていると思うが、なぜ結果が出ないのか。

参事兼教育指導課長

結果の数値は重く受け止めなくてはならないと思う。しかしながら、学力向上を目指していくためには、一つの方向性というものが必要だと思っている。ぶれない部分と、結果を受けて、更新していく部分が必要だと感じている。年度ごとに数値が変わることで毎回、方向転換していくことは違うと思っている。川越市として一つのぶれない方向性を持って、それを継続しながら数値など、結果を検証し、随時更新をしていくことが非常に重要だと考えている。

今回の調査の成果として、子どもたちや教職員の質問紙調査の中では、本市が進めている、主体的・対話的で深い学びの数値について、よい数値が出ている。本市が進めている学力向上プランの浸透は、深まりつつあると思っている。今回も具体的な部分の調査を実施したので、そのような部分も、今後新たに更新を進めたいと思っている。

委員

学力を伸ばした児童生徒の割合が伸びた学校もあるが、伸びた理由はどこにあると考えるか。

参事兼教育指導課長

委嘱学校研究を受けた学校は学力を伸ばしている傾向にある。

委員

そのような結果であれば、全校で実施すればよいと思う。よい取組については、共有して、取り組むことが大事だと思うので、教育委員会として指導してほしいと思う。

教育格差についての分析がないが、格差についての現状はどのようになっているか。

参事兼教育指導課長

教育格差については非常に難しい問題だと思っている。公立の小・中学校なので、誰1人取り残すことなく、学力をつけていく必要がある。どのような子であっても、

どんな状況であっても、みんなが学力をつけられるシステムが必要と考える。

委 員

児童生徒質問紙調査結果から、本市の歴史や自然に関心を持っている児童生徒が多いことや、規律ある態度の児童生徒が多いことがわかる。学校では、人間教育についても、非常に大事な部分だと思うので、本市の子どものよさを前面に出した方がよいと思う。

委 員

今回の結果を受けて、学力向上について、本市の教育委員会としての達成度についてどのように捉えているか。

参事兼教育指導課長

進めてきた方向性については、間違いはなかったと思うが、結果が顕著には出ていないと感じている。

委 員

平均と比べたら低い数値ではあるが、それでも経年的なマイナスの数値は減っているので、成果が出ていると受け止めた。学力調査の結果について、どこを目指しているか本市で共有している部分はあるのか。

参事兼教育指導課長

目に見えるものがないと学力がついたか否かを測ることが難しいので、今回の調査結果の数値もやはり数値目標という形で捉えている。そこを少しでも超えられるようにする、そこに向けて頑張るということが一つの目標となる。

委 員

全体の評価を見ると、小学校の国語については全国平均と比べマイナスであるが、中学の国語は、全国平均と比べプラスになっている。本市の子どもは、中学校に上がってから学力が伸びる子どもが多いと解釈をした。どう解釈するかによって見え方も違ってくと思う。

また、「規律ある態度」の達成目標をみて、学力ばかりではなく心の部分の数値がよかったことに安心している。心の部分の育成は、時間をかけて育む必要があると思っているので、ここがうまくいくと、自己肯定感というのを育ていける糧になると思う。

児童生徒質問紙調査結果について、「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦している」というところで、中学2年生、3年生の結果が、全国平均を下回っている。これが、逆に、学力が伸びない一つの理由だと思っている。小学生のときや中学1年生のときは、挑戦する力がいっぱいあったのに、中学2年生、3年生になって減少しているといことは、無難に行動するという子どもになっているかもしれないと思ったので、ここを伸ばしてほしいと思う。

教育長

「規律ある態度」の達成目標や児童生徒質問紙調査結果についての結果がよい。本市の学校の先生たちが一生懸命取り組んでもらっている成果だと思っている。しかしながら、平均正答率の数値については低く、学力についても、一人ひとりの子どもを伸ばすことが我々の使命であると考え。これは国が現場に与えているメッセージであると考え、結果を真摯に受け止めてほしい。先ほど教育指導課長から学校訪問で指導すると話があったが、具体的に何について指導をするのか。

参事兼教育指導課長

今回の結果をもとに分析を行い、課題と具体的な策を明確にできた。それを具体的にやることと、自分の学校の児童生徒のことをよく知ってもらうことが大事だと今回感じた。改めて子どもたちのつまずいている部分や子どもたちのよさといったものをうまく使いながら、バランスを持って子どもたちを育てていきたい。そういった部分を主張していきたいと思う。

教育長

授業を改善していくということが、各学校これから取り組まなくてはならないことだと思う。報告書の中に問題が載っているが、先生たちが実際に問題を解くことで、どのような授業を行わなくてはならないか、何が求められているのかがわかると思う。分析ばかりではなく、問題を実際に解くことにより、先生たちが分析できるようにしてもらいたい。

私が、学力調査で求めることは、無回答をなくしていきたいことである。難しい問題も、恐れなくて挑戦し、問題が退屈でも、それが終わるまでやり遂げることにについて指導してもらいたい。

最後に、学力向上については、子ども達がこれから生きていく上で身に付けなければならない力であると考え、教育委員会全体で、課題として取り組んでほしい。ぜひ他の理事者についても、それぞれの課で対策を練り、学力向上に係ることのできるか考え、全体で押し上げるように、学校を支援するようにしてほしいと思う。

1 1 その他

- (1) 議事に先立ち、議案第31号は意思決定過程における情報にあたり、議案第32号は性質上公開になじまない事務事業にあたることから、これらの審議に係る会議を公開しないこととする動議が提出され、全出席委員がこの動議に賛成し、当該審議については非公開として取り扱うことに決定した。
- (2) 会議録の署名委員として佐久間委員、飯島委員が指名された。